

15 世紀諺解資料における「2 字漢語」の扱いについて

上 保 敏

富山大学人文学部紀要第 63 号抜刷

2015 年 8 月

15世紀諺解資料における「2字漢語」の扱いについて

上 保 敏

1. 序言

漢語は1単語が1音節(1字)からなるものと一般に言われるが、2字でもって1語を為すような単語もまた存在する。王力(1980:55)は、「漢語ははじめから単音節語ではなかった。先秦時代にはすでに大量の2音節語が存在した」と述べているが、これに対して志村良治(1984:15)は、中世(魏晉より唐末、五代までを指し、中古にほぼ相当する)の時代の語法上の特徴の1つとしてこの複音節語彙の増加を挙げている。志村良治(1984:18)はさらに、こうした「複音節化は当時の口語における傾向が文章語に反映するものである」としている。

こうした2字漢語に関しては、当然、漢語史上の問題として取り扱われるべき重要なテーマであり、実際、これまでに数多くの研究が積み重ねられてきたというが、また一方、日本の漢文訓読研究においては、主として『日本書紀』や『古事記』などの古訓を扱う中で、この2字漢語がどのように訓じられているのか、という問題が取り扱われてきた¹⁾。すなわち、2字漢語の訓読問題が漢文訓読研究の一部分としての位置を占めてきたことになる。

ところが朝鮮語においては、このような口語性を反映しているともされる2字漢語の問題について、従来さほど注意が払われてこなかったように思われる²⁾。しかしこれは、中国の周辺民族が漢文を読む際の漢文原文に対する理解度の問題へと大きく関わってくることからであると思われ、また、当時の朝鮮における漢文訓読の読法を垣間見ることができると重要なテーマの1つになり得るものと考えられる。

そこで、本報告では、調査対象の諺解資料をもとに、このような2字漢語がどのように読まれているかを調査し、15世紀の朝鮮におけるこれらの語の扱いについて考察することとした。

1) 松尾良樹(1986, 1987), 唐焯(2009)など。

2) ただし、『語録解』や『訳語類解』など、殊に近世語以降に生じたとされる2字(以上)よりなる熟語が掲載され諺解も付された辞典類が存在するが、これらは「近世的熟語の意義及び助詞の使用法等を簡便に知り得べき、実用的の辞書が要求せられるに至った」[小倉進平[河野六郎 補注](1964:544)]ことによるものであるという。

要解が付されており、漢文原文の成立年代は実に様々である⁴⁾。従って、厳密に調べるならば、調査に先立って、これらの原文の成立年代をしっかりと考証し、それぞれの時代の言語を漢語史の観点から十分に検討しなければならないところであるが⁵⁾、本研究では、こうした作業は行わずに、『楞嚴経諺解』と『法華経諺解』の漢文原文をすべてを一律に扱い、その読法について考察することにする。もとの原文が反映している漢語の時代ももちろん重要ではあるが、本研究ではむしろ15世紀の朝鮮における2字漢語に対する認識がどのようなものであったか、という点に力点を置くためである。

本研究では、こうした2字漢語の中でも、とりわけ、1字が接辞化して2字漢語を為す傾向が強いとされる副詞語を中心に取り上げ、その諺解文における扱いについて、考察することとする。これらの2字漢語を1語化した漢語として認識していたか否か、という点が、主要な論点になる。ここでは、従来、2字漢語として扱われてきた語として、長尾光之(1972, 2005a, 2005b)に挙げられているものを中心に、その他、志村良治(1984)や太田辰夫(1958/1981, 1988)、松尾良樹(1986, 1987, 1988a, 1988b)などに挙げられているものの中から適宜補って、見ていくことにする。

具体的には、以下のような2字漢語を考察の対象にした⁶⁾。

1. 「自」によるもの

即自・便自(すぐに, すなわち), 益自(ますます), 徒自(むだに), 及自(および), 既自(す

4) 『楞嚴経諺解』は、般刺密帝が705年に漢訳した『楞嚴経』の本文に対して、宋の戒環が1127年に註解した要解が原典になっている。

また、『法華経諺解』は、鳩摩羅什が406年に漢訳した『法華経』の本文に対して、宋の戒環が1126年に註解した要解と、明の一如の集註が原典になっている。ただし、諺解は経の本文と戒環の要解に対してのみ為されている。

なお、塩田義遜(1943)によると、『法華経』の本文は、すべてが鳩摩羅什の訳したものではなく、第12「提婆達多品」は推定490年に、第25「観世音菩薩普門品」の偈の部分は推定569年に付加されたものである、という。

5) 太田辰夫(1958/1981:410-412)では、唐代以前の漢語を研究する際に、訳経をもっと大量に使用すべきであると述べつつも、訳経を用いる際に時代考証に注意を払うべきであるということをも喚起しているが、また同時に、具体的な例をいくつか挙げながら、それがきわめて困難な作業であることも述べている。

6) それぞれの2字漢語の意味については、『大漢和辞典』、『漢語大詞典』によるもののほか、長尾光之(1972, 2005a, 2005b)、松尾良樹(1986, 1987, 1988a, 1988b)、太田辰夫(1958/1981, 1988)、志村良治(1984)などを参考にして、便宜的に付しておいたものである。また、それぞれの語について、2字漢語として1語化が進んでいるのか否かについて判断することは容易ではなく、また、語によってもその固定度は異なるであろうことは、言うまでもないことである。

なお、考察対象の用例の中には、副詞語として使われたものではないものも含まれていることを付言しておく。

- でに), 各自(めいめい), 本自(もともと, もとより), 或自(あるいは), 常自(もともと), 毎自(いつも), 親自(みずから), 甚自(たいへん), 能自(よく), 亦自(また)
2. 「復」によるもの
倍復(ますます), 或復(あるいは), 況復(まして～あるからには), 須復(すべからく), 設復・若復(もし), 雖復(～ではあるが), 亦復・又復(また), 還復(かえって)
 3. 即便・便即(すなわち)
 4. 「次」によるもの
轉次(つぎつぎに), 漸次(しだいに, だんだんに), 次復・次後(つづいて, ついで)
 5. 「曾」によるもの
亦曾・曾亦・適曾・昔曾・已曾(すでに, かつて)
 6. 「已」によるもの
並已・皆已・悉已・已悉(みな・すっかり), 久已・永已(長い間・すっかり), 漸已(徐々に), 既已(すでに)
 7. 「更」によるもの
復更(また), 轉更(つぎつぎと, さらに), 各更(おのおの)
 8. 「相」によるもの
互相・遞相・交相・更相・共相(たがいに, とともに)
 9. 「共」によるもの
各共(おのおの), 亦共・俱共・與共(ともに), 皆共(みな)
 10. 「皆」によるもの
亦皆(みな), 普皆(あまねく, ひろく), 咸皆(みな), 徧皆(あまねく), 悉皆(すべて)
 11. 「同」によるもの
皆同(みな), 悉同(すべて), 又同(おなじく), 亦同(ともに)
 12. 「悉」によるもの
皆悉(みな)
 13. 「亦」によるもの
悉亦(みな), 又亦(また), 蓋亦(みな, なお)
 14. 「又」によるもの
次又(つぎに, ついで)
 15. 能善・善能(よく)
 16. 「來」によるもの
今來(いままで, ただいま), 歸來(かえって), 將來(すぐに), 本來・從來(もとより), 已來(そののち, 以来)

3. 調査結果の概要

調査に際しては、先に述べたように、これらの2字漢語を1語化した漢語として認識していたか否か、という点をひとまず主要な論点とした。以下、類型別に分類しつつ、見ていくことにする。

3.1. 1字ずつ逐字的に読んでいるもの

調査対象の2字漢語のうち、大部分の例は2字漢語を為す漢字を1字ずつ逐字的に読んでおり、その点、2字漢語を1語化したものと見なすような意識はたいへん希薄であった。

いまここに、「自」によるものの中から例を挙げると、以下のようなものである。

- (1) a. 臨欲終時_{ᄃᆞ}야 而命其子_{ᄃᆞ}며 并會親族과 國王과 大臣과 刹利와 居士_{ᄃᆞ}야 皆悉已集
거늘 卽自宣言_{ᄃᆞ}되 諸君이 當知_{ᄃᆞ}라
b. ᄃᆞ마 주글 쩌 디러 아득_{ᄃᆞ}를 命_{ᄃᆞ}며 아슴과 國王과 大臣과 刹利와 居士와 아오로 피
화 다 ᄃᆞ마 묻거늘 즉재 제 퍼 닐오_{ᄃᆞ}되 諸君이 반_{ᄃᆞ}기 알라 <法華2:222b_本>⁷⁾
- (2) a. 物이 果無相_{ᄃᆞ}면 則同龜毛_{ᄃᆞ}고 物이 果非無_{ᄃᆞ}면 卽自有相_{ᄃᆞ}리니
b. 物이 果然 相이 업스면 거부비 터리 곧고 物이 果然 업디 아니_{ᄃᆞ}면 곧 제 相이 이시
리니 <楞嚴1:75b_解>
- (3) a. 如無智愚人_{ᄃᆞ}야 便自以爲足_{ᄃᆞ}다이다
b. 智慧 업슨 어린 사름 곧_{ᄃᆞ}야 곧 제 足을 삼다이다 <法華4:43a_本>
- (4) a. 如以手掌_{ᄃᆞ}로 撮摩虛空_{ᄃᆞ}ᄃᆞ야 祇益自勞이언_{ᄃᆞ} 虛空이 云何隨汝執提이리오
b. 숲바당_{ᄃᆞ}로 虛空을 자마 뺏_{ᄃᆞ}ᄃᆞ야 더욱 제 긋글 쑤니언_{ᄃᆞ} 虛空이 엇데 네 자보물
조츠리오 <楞嚴2:70a_本>
- (5) a. 徒自燒身ᄃᆞᄃᆞ 何於苦惱애 欲求善報 | 리오_{ᄃᆞ}히니
b. ᄃᆞᄃᆞ 제 모달 손_{ᄃᆞ}ᄃᆞ 엇데 苦惱애 선_{ᄃᆞ} 報를 求_{ᄃᆞ}리오 ᄃᆞ히니 <法華6:145b_解>
- (6) a. 是經은 難得聞이며 信受者도 亦難故로 凡書持讀說이 非假如來入 覆護_{ᄃᆞ}며 及自有

7) 用例は、このように、(a)にハングル口訣の懸吐された漢文の原文を、(b)に諺解文を引用し、併記することとする。また、出典情報の末尾に、經の本文部分からの引用は「本」、宋の戒環による要解部分からの引用は「解」と付す。

信願善根이면 莫之能矣리라

- b. 이 經은 시러 드로미 어려우며 信受할 싸름도 쏘 어려울씩 물읷 쓰며 디니며 닐그며 닐오미 如來入 두퍼 護持호샤물 비스오며 쏘 제 信願善根 甴느니 아니면 能히 甴호리라 <法華 4:88b_解>
- (7) a. 而分品이 似濫者는 身子 | 既自領悟法說호야
 b. 品 는 호미 윈 듯호든 身子 | 호마 제 法說을 領悟호야 <法華 2:2b_解>

(1)~(2)は漢文の原文が「即自」, (3)は「便自」となっている例である。ともに、『大漢和辞典』, 『漢語大詞典』には記載がないが, 「すぐに」, 「すなわち」といった意味である。ただし, これに対応する諺解文においては, (1)は「즉제 제」, (2)~(3)は「곧 제」となっており, いずれの例も, 「即」と「自」, 「便」と「自」を1字ずつ逐字的に読んだ形になっている。

(4)は原文が「益自」, (5)は「徒自」, (6)は「及自」, (7)は「既自」となっている例である。いずれも, 『大漢和辞典』, 『漢語大詞典』ともに記載がないが, (4)の「益自」は「ますます」, (5)の「徒自」は「むだに」, (6)の「及自」は「および」, (7)の「既自」は「すでに」といった意味である。ただし, これらの用例において, 対応する諺解文においては, やはり1字ずつを逐字的に読み, (4)は「더욱 제」, (5)は「흔갓 제」, (6)は「쏘 제」, (7)は「호마 제」となって現れている。やはりこれらの2字漢語を1語化したものとする認識は見られず, それぞれの漢字を逐字的に読んでいる。

- (8) a. 各自藏護는 譬畜積忿毒호야 不可凌犯호시고
 b. 各各 제 마초야 護持호든 怒호 毒을 되화 거위 甴호물 가즐비시고 <法華 2:117a_解>
- (9) a. 盖衆生の 佛性이 本自圓成호며 世間業行이 皆順正法호니
 b. 衆生の 佛性이 本來 제 圓成호며 世間 業行이 다 正法을 順호니 <法華 6:78b_解>

(8)の例は, 漢文の原文が「各自」, (9)は「本自」となっている例であり, 『大漢和辞典』では(8)の「各自」について「①めいめい。②特別。異なる。』, 『漢語大詞典』には「①各人自己。②指事物的各個自身。③自己;獨自。」と記載されている。(9)の「本自」は『大漢和辞典』には記載がないが, 『漢語大詞典』には「本來就, 一向是。」と記載があり, 「もともと, もとより」といった意味である。これらの例では, 1字目の「各」, 「本」を諺解文では2字で読んでおり, (8)は「各各」といった疊語形式に, (9)では「本來」と「來」を補った形になっている。このことは, 「各各」や「本來」が当時の朝鮮語の語彙として定着していたことを物語るものであると考えられるが, いずれにしても, 2字漢語をそれぞれ1字ずつ逐字的に読んでいる点は, かわりがない。

- (10) a. 或得宿命^{ᄃᆞᆫ}며 或有他心^{ᄃᆞᆫ}며 或見地獄^{ᄃᆞᆫ}며 或知人間好惡諸事^{ᄃᆞᆫ}며 或口說偈^{ᄃᆞᆫ}며 或自誦經^{ᄃᆞᆫ}야 各各歡娛^{ᄃᆞᆫ}야 得未曾有^{ᄃᆞᆫ}리니
 b. 시혹 宿命을 得^{ᄃᆞᆫ}며 시혹 他心이 이시며 시혹 他獄을 보며 시혹 人間엿 도^{ᄃᆞᆫ}며 구
 즌 여러 이틀 알며 시혹 이베 偈를 니르며 시혹 제 經을 외와 各各 즐겨 아릿 잇디
 아니호믈 得호라 케 ᄃᆞᆫ리니 <楞嚴9:94a_本>
- (11) a. 諸法이 從本來^{ᄃᆞᆫ}야 常自寂滅^{ᄃᆞᆫ}相이니 佛子 | 行道已^{ᄃᆞᆫ}면 來世에 得作佛^{ᄃᆞᆫ}리라
 b. 諸法이 本來부터 상네 제 寂滅^{ᄃᆞᆫ} 相이니 佛子 | 行道^{ᄃᆞᆫ}면 來世에 부터 ㄷ외요믈 得
 ᄃᆞᆫ리라 <法華1:212a_本>
- (12) a. 爾時 阿難과 羅睺羅^{ᄃᆞᆫ} 而作是念^{ᄃᆞᆫ}호디 我等이 每自 思惟^{ᄃᆞᆫ}호노니
 b. 그 ㅍ씩 阿難과 羅睺羅^{ᄃᆞᆫ} 왜 이 念을 호디 우리 딴상 제 스랑^{ᄃᆞᆫ}호노니 <法華4:47a_本>

(10)의例は「或自」, (11)は「常自」, (12)は「每自」となっている例である。いずれの例も『大漢和辞典』, 『漢語大詞典』ともに記載がないが, (10)の「或自」は「あるいは」, (11)の「常自」は「もともと」, (12)の「每自」は「いつも」といった意味である。ただし, これらに対応する諺解文においては, それぞれの2字漢語の1字目を「시혹」, 「상네」, 「딴상」としているが, これらの語はもともと「時或」, 「常例」, 「每常」といった漢字語起源である。従って, これらの例においては, 1字目を漢字語起源の2字熟語で読んだ上, それを正音表記していることになる。このことから, 「시혹」, 「상네」, 「딴상」などの語も, 朝鮮語の語彙として定着しており, また固有語化への道も進んでいたであろうことがうかがえる。また, いずれにしても, 2字漢語をそれぞれ1字ずつ逐字的に読んでいる点は, かわりがない。

- (13) a. 或不因師^{ᄃᆞᆫ}야 其修行人이 親自觀見^{ᄃᆞᆫ}호디 稱執金剛이로니 與汝長命^{ᄃᆞᆫ}호노라^{ᄃᆞᆫ}며
 b. 시혹 스승을 因^{ᄃᆞᆫ}디 아니^{ᄃᆞᆫ}야 그 修行을 ㅍ르미 親히 제 보^{ᄃᆞᆫ}디 닐오^{ᄃᆞᆫ}디 執金剛이로니
 너를 長命 주노라 ᄃᆞᆫ며 <楞嚴9:117a_本>
- (14) a. 而我等은 不預斯事^{ᄃᆞᆫ}야 甚自感傷^{ᄃᆞᆫ}호디 失於如來入 無量知見^{ᄃᆞᆫ}호라^{ᄃᆞᆫ}다이다
 b. 우린 이 이레 參預 묻^{ᄃᆞᆫ}야 甚히 내 感傷^{ᄃᆞᆫ}호디 [感은 ㅍ스미 뵈 씨오 傷은 알폴 씨라]
 如來入 無量知見을 일호라 ᄃᆞᆫ다이다 <法華2:4b_本>
- (15) a. 阿難아 如是世界엿 十二類生이 不能自全^{ᄃᆞᆫ}야 依四食^{ᄃᆞᆫ}야 住^{ᄃᆞᆫ}호노니
 b. 阿難아 이 마디 世界엿 十二類生이 能히 제 오디 묻^{ᄃᆞᆫ}야 四食을 브터 住^{ᄃᆞᆫ}호노니 <楞
 嚴8:3b_本>

(13)は「親自」, (14)は「甚自」, (15)は「能自」となっている例である。このうち, (13)の「親自」は, 『大漢和辞典』に「自ら。手ずから。自分で」, 『漢語大詞典』に「自己親身。」と記

載がある。それ以外の語は『大漢和辞典』、『漢語大詞典』ともに載っていないが、(14)の「甚自」は「たいへん」、(15)の「能自」は「よく」といった意味である。これらに対応する諺解文では、やはり1字ずつ逐字的に読んでいるのがわかるが、それぞれの1字目に対して、諺解文では「-히」を付けて副詞形にして、「親히」、「甚히」、「能히」などとなっている。こうした現象もやはり、これらが当時の朝鮮語の語彙として定着していたことを物語るものであろう⁸⁾。

以上の(1)～(15)の用例は、いずれも2字漢語を1字ずつ逐字的に読んだ例であった。これらと事情を異にするのが以下の例である。

- (16) a. 長者 | 亦自恐被焚者^ㄴ 譬佛이 示身三界^ᄃ샤 與民同患也^ᄃ시니라
 b. 長者 | 또 제 슬요물 니블까 저호민 부테 三界에 모물 뵈샤 百姓과 시름 마티 ᄃ샤
 물 가즐비시니라 <法華2:68a_解>
- (17) a. 得是陀羅尼故로 無有非人이 能破壞者^ᄃ며 亦不爲女人之所惑亂^ᄃ고 我身이 亦自常
 護是人호리니
 b. 이 陀羅尼 得흔 전츠로 사름 아닌 거시 能히 헐리 업스며 또 女人의 惑히와 어즈류
 미 드외디 아니코 내 모미 또 이 사름을 상네 擁護호리니 <法華7:172a_本>

(16)～(17)は、漢文の原文が「亦自」となっている例である。この語も『大漢和辞典』、『漢語大詞典』ともに記載がないが、「また」といった意味である。これに対応する諺解文においては、(16)のように「또 제」と2語で読む例が多くを占めており、1字ずつ逐字的に読んでいる点は、上記の(1)～(15)の用例とかわるところはないが、(17)のように「또」と1語で読んだ例が見られるのである。ただし、この(17)のような例はこの1例のみであり、誤記である可能性も排除できないが、そうでないとすれば、唯一の例外ということになる。

実際、これらの「自」の付いた語について、2字漢語として1語化が進んでいるのか否かについて判断することは容易ではなく、また、語によってもその固定度は異なるであろう。従来の研究においても、「自」を接辞として扱う研究は多くあるが、それぞれの研究において実際に挙げられている具体的な用例は、互いに異なっている⁹⁾。

従って、ここに挙げたような15世紀の諺解資料の用例にあっても、その判断は非常に難しく、

8) 国立国語研究院(1993:6-7)では、15世紀の韓国の漢字語であるか否かを区分する基準をいくつか挙げているが、その中の1つとして、副詞派生接尾辞「-히, -로, -ㄴ이(ㄴ비), -로이, -혀」や動詞派生接尾辞「-ᄃ-」などが付いた漢字は、15世紀の韓国の漢字語として取り扱う、としている。

9) 松尾良樹(1988b)では、「本自」、「便自」、「各自」、「極自」、「手自」、「即自」、「親自」、「猶自」などの例が挙げられており、太田辰夫(1988:60-61)では「正自」、「本自」、「手自」、「必自」、「便自」、「猶自」などの例が挙げられている。

実際は不可能に近いと言わざるを得ない。しかし、ここで指摘しておくべきことは、対応する諺解文において、ほとんどすべての用例について、これらの2字漢語を1語化したものとして捉えることはせず、それぞれの漢字を1字1字逐字的に読んでいる、という点である。すなわち、漢文原文の「～自」に対して、前件の「～」の部分についてそれぞれ読んだ後、後件の「自」の部分「제」, 「내」, 「자가」などでもって、2字を別々に読んでいる、ということである。例外は、上で見たように、「亦自」を「또」とのみに読んだ(17)の例であるが、これを除けば、例外は1つもなくなることになる。

なお、その他の2字漢語にあっても、大部分の例は2字漢語を為す漢字を1字ずつ逐字的に読んでおり、その点、2字漢語を1語化したものと見なすような意識はたいへん希薄であったと言える¹⁰⁾。

中でも、次のような例には、注目する必要がある。

- (18) a. 心縱精明흔들 欲何因緣로 取夢中物호리오 況復無因호야 本無所有 | 쓰너
 b. 므스미 비록 精明흔들 므슴 因緣로 夢中옛 物을 取 | 코져 호리오 흔들며 또 因이 업서 本來 잇는 고디 업스너 쓰너 <楞嚴4:59b_本>
- (19) a. 藥王아 在在處處에 若說커나 若讀거나 若誦커나 若書커나 若經卷所住之處에 皆應起七寶搭호되 極令高廣嚴飾호고 不須復安舍利니 所以者何오
 b. 藥王아 잇는 곧마다 니르거나 넓거나 외오거나 쓰거나 經卷 잇는 고대 다 七寶塔을 세오되 마장 놓고 넓고 식식기 꾸미고 구되여 다시 舍利 두디 마를띠니 엇데어노 <法華4:89a-89b_本>
- (20) a. 若能勤進호면 猶可庶幾어니와 設復退墮호면 又安知未來之期로 比前塵劫컨댄 不復過於是數耶 | 리오
 b. 호다가 能히 브즈러니 나사가면 오히려 어루 거의려니와 호다가 또 물러디면 또 未來옛 그스므로 알릿 塵劫을 가즐비컨댄 또 이 數에 더오디 아니홀 딸 엇데 알리오 <法華3:165b_解>

(18)の例は、漢文の原文が「況復」、(19)は「須復」、(20)は「設復」となっている例である。これらも『大漢和辞典』には記載が見られないが、『漢語大詞典』には(18)の「況復」について、「①更加;加上。②何況, 況且。③仿佛, 好像。」と記載があり、ここでは①, ないし②から「まして～あるからには」といった意味であると捉えておく。その他、(19)の「須復」は「すべからく」、

10) ここでは具体的な用例を1つ1つ挙げるのは避けることにする。なお、末尾の用例集を参照のこと。

(20)の「設復」は「もし」といった意味である。ただし、(19)の「須復」はすべての用例が否定文として使われているため、「あえて」といった意味であると考えられる。

これらに対応する諺解文においては、(18)は「헝물며 쏘」, (19)は「구퓌여 다시」, (20)は「헝다가 쏘」となっている。しかもこれらの例においては、それぞれの文の後ろの部分で、ある種の語尾類と呼応関係を結んでいるのがわかる。すなわち、(18)であれば、文末の「업스니 쏘녀」の中の「-이쏘녀」, (19)は「말다」に未実現の連体形語尾「-(으/으)ᄃᆞ」に形式名詞「ᄃᆞ」が続いた形が「-오/우-」を介して付いた形態、(20)は条件をあらわす接続形語尾の「-(으/으)면」などである。

こうした呼応関係は、以下に見るように、「況」, 「須」, 「設」が単独で使われた場合にも見られるものである¹¹⁾。

- (21) a. 當知虚空이 生汝心内호미 猶如片雲이 點太清裏헝니 況諸世界 | 在虚空耶 | 쏘녀
 b. 반ᄃᆞ기 알라 虚空이 네 맘 숨 안해 나미 片雲이 大清 안해 點흔 듯헝니 헝물며 한世

11) 中期朝鮮語において、語の呼応関係に注目しある程度まとまった考察を加えたものとしては、まず、李崇寧(1961/1981:412-421)が挙げられ、そこでは語の呼応は「現代語にも見られるが、15世紀のほうがよりいっそうはっきりとしているように感じる」と述べている。さらに、呼応関係の漢文からの影響関係について論じたものに南豊鉉(1971a, 1971b)などがある。

なお、上記(21)～(23)に挙げた「況」, 「須」, 「設」のうち、「況」は調査対象の諺解資料において、動詞として読まれた場合に「가즐비다」となる例を除いては、副詞の「헝물며」と読まれ、例外はなかった。ただし、これと呼応する疑問や反語をあらわす語尾類は、現れる場合と現れない場合があり、呼応は任意であると言える。

また、「須」については、肯定文の場合には「모로매」, 否定文においては「구퓌여」と読まれるものが多数で、これらが命令形語尾「-(으/으)라」, 未実現の接辞「-(으/으)리-」, 未実現の連体形語尾「-(으/으)ᄃᆞ」などと呼応関係を結ぶものが見られた。ただし、ここでも、こうした語尾類が呼応しない例もあるのに対して、これら「모로매」や「구퓌여」などは必須の成分であり、これらの副詞を欠いて語尾類のみで読まれるような例は見られなかった。なお、高正儀(1980:79-80)は、「구퓌여」は肯定文にも現れる、としているが、本研究で調査の対象にした諺解資料において、「須」に対する諺解文としては、否定表現としてのみ「구퓌여」が現れた。

「設」については、「땡글다」, 「피다」といった動詞として読まれる例が多数を占めるが、その一方で、これが助字として使われた場合には、副詞「헝다가」, 「비록」と読まれ、これらが譲歩をあらわす接続形語尾「-아도/어도」や条件をあらわす接続形語尾「-(으/으)면」と呼応を見せていた。ただし、ここでも、前件の副詞「헝다가」, 「비록」が現れずにこれらの語尾のみで読まれた用例が1例も見られなかった。

こうしたことから、これら「況」, 「須」, 「設」はそれらの副詞語として読むのが大原則であり、語尾類の呼応は、朝鮮語の文構造上、副詞語の影響によって呼応が起り得る要素であり、副詞語に従属する付随的な要素であると考え得る。またこのことは、山口昭穂・秋本守英 編(2001)でこの種の呼応関係を認定する条件の1つとして、「その相互関係に強い必然性が認められないこと」としているのと軌をとともにするものであると考えられる。

界 虚空애 이쇼미쓰너 <楞嚴9:44a-44b_本>

- (22) a. 爾時世尊이 重說偈言호샤디 止止호라 不須說이니라
 b. 그 씩 世尊이 다시 偈를 니르샤디 말라 말라 구티어 니르디 마를띠니라 <法華 1:168a_本>
- (23) a. 設得授記호면 不亦快乎아호고
 b. 호다가 授記를 得호면 아니 甍호려 호고 <法華 4:47a_本>

すなわち、これらの呼応関係は、後件の「復」の有無に拘わらず起こっていると言えるものである。また、その上で「復」に対応する語として「쓰」, 「더욱」などと読んでいることから、これらの2字漢語もやはり、1語化したものとは見なさず、語の呼応関係までをも含めて、1字ずつ逐字的に読んでいるのがわかる。

以下も、これに準ずる例であるが、ここでは用例のみ挙げておくにとどめる。

- (24) a. 眞空實相은 擬心호면 即妄이니 若復分別有無是非호면 皆顛倒也 | 라
 b. 眞空 實相은 마스매 니기면 곧 妄이니 호다가 또 有無是非를 글히면 다 갓마로미라 <法華 5:30b_解>
- (25) a. 雖復教詔호나 而不信受호느니 於諸欲染에 貪着이 深故 | 라
 b. 비록 또 마르쳐 니르나 信受 아니 호느니 여러 欲染에 貪着이 기픈 전치라 <法華 2:144a_本>
- (26) a. 八百弟子中에 有一人호디 號曰求名이러니 貪着利養호야 雖復讀誦衆經호야도 而不通利호야 多所忘失호씨 故號求名이러니
 b. 八百弟子 中에 호 사르미 이쇼디 일후미 求名이러니 利히 츄믈 貪着호야 비록 또 한 經을 닐거 외와도 通利티 못호야 니저 일후미 만호씨 일후미 求名이러니 <法華 1:113a-113b_本>

さらに、以下のように、諺解文において読まれた2語が離れた位置に置かれている場合には、そうした認識が如実にあらわれたものと考えることができよう。

- (27) a. 故로 八方애 各更變 二百萬億那由他國호샤 皆令清淨케호시니
 b. 그럴씨 八方애 各各 二百萬億 那由他國을 다시 變호샤 다 清淨케 호시니 <法華 4:123a_本>
- (28) a. 菩薩은 煩惱涅槃이 不相留礙호디 而云亦共汝作者는 以同事로 攝也 | 라
 b. 菩薩은 煩惱 涅槃이 서르 막디 아니호디 또 너와 호디 지소리라 닐오믈 호디 일호

므로 자비실씨라 <法華 2:207a_解>

- (29) a. 末後에 同時에 於十方國에 各得成佛호야 皆同一號호야
 b. 내중 後에 호뻘 十方國에 각각 부터 드외야 다 호 號 | 곧호야 <法華 4:64a_本>
- (30) a. 亦同前助顯호샤디 簡文호시니라
 b. 쏘 알랏 도아 나토샤미 곧호샤디 文을 적게 호시니라 <法華 1:228b_解>
- (31) a. 世尊하 我 | 又獲是圓通호야 修證無上道故로 又能善獲四不思議無作妙德호니
 b. 世尊하 내 쏘 이 圓通을 어더 우 업슨 道를 닷가 證혼 전츠로 쏘 能히 네 不思議 無作妙德을 이대 어두니 <楞嚴 6:36a-36b_本>

3.2. 1語でもって読んでいるもの

その一方で、少数ながら、2字漢語を1語化したものと見なし得るような例も、いくつか見られた。

その第1の例は、以下のようなものである。

- (1) a. 而我不款待호스와 但初聞四諦호습고 即便信受호스와 速取小果 | 라호니 盖自誤也 | 로다
 b. 내 날호야 기드리습디 아니호스와 오직 처섬 四諦 듣습고 즉재 곧 信受호스와 저근 果를 썰리 가조라 호니 제 외요라 토다 <法華 2:7a_解>
- (2) a. 時王이 聞仙言코 心生大喜悦호야 即便隨仙人호야 供給於所須호디
 b. 그제 王이 仙人 말 듣고 므스매 마장 깃부물 내야 즉재 仙人 조차 求호는 거슬 供給 호디 <法華 4:156b_本>
- (3) a. 其諸子中에 不失心者는 見此良藥의 色香俱好호고 即便服之호니 病盡除愈호고
 b. 그 諸子 中에 므스 일터 아니호닌 이 良藥의 色香이 다 도호 들 보고 곧 머그니 病이 다 도코 <法華 5:156a_本>

(1)~(3)は、漢文原文が「即便」となっている例であるが、「便」も「即」も「スナハチ」。すぐにの意を表わす接続詞。「便即」「即便」と同義結合で二音節化して多用される」[松尾良樹(1987:3)]という。また、長尾光之(2005a:70)でも、「「即」は「つまり」「そこで」「すぐに」という意味の副詞であり、古代にも用いられていた。訳経にも「即」は古代と同じように常用されるが、それと平行して「便」が用いられるようになる」としている。『大漢和辞典』では、「便即」は記載がなく、「即便」については「すなはち。すぐに。」と記載されている。『漢語大

詞典』も同様に、「即便」についてのみ「①立即。②即使。」と記載されている¹²⁾。

(1)の例では、漢文原文の「即便」を「즉재 곧」と、それぞれ1字ずつ逐字的に2語でもって読んでいる。これに対して、(2)～(3)ではそれぞれ「즉재」,「곧」と1語でもって読んでいる。また、(2)～(3)に見られる「즉재」,「곧」ともに、(1)の読法に見られた2語のいずれかであり、また、「즉재」と「곧」は、類義語でもある¹³⁾。

これは、上記の引用に見たように、「即」と「便」がともに類似した意味を持っており、この2字が合わさった「即便」もまた、同様の意味を持つ1語の漢語として認識していたため¹⁴⁾、(2)～(3)においては、「즉재」,「곧」と1語で読まれたものと思われる。

同様の例をもう1点挙げると、以下のようである。

- (4) a. 華德아 是妙音菩薩이 已曾供養親近無量諸佛ᄃᆞᆫ와 久植德本ᄃᆞᆫ며 又值恒河沙等百千萬億 那由他佛ᄃᆞᆫ니라
 b. 華德아 이 妙音菩薩이 ᄃᆞᆫ마 아ᄃᆞᆫ 無量 諸佛을 供養親近ᄃᆞᆫ와 德本을 오래 시르며 또 恒河沙等 百千萬億 那由他佛을 만나니라 <法華7:26a_本>
- (5) a. 我 | 已曾與恒沙如來와 爲法王子호니 十方如來 | 教其弟子菩薩根者ᄃᆞᆫ샤ᄃᆞᆫ 修普賢行ᄃᆞᆫ라ᄃᆞᆫ시ᄃᆞᆫ니 從我ᄃᆞᆫ야 立名ᄃᆞᆫ니이다
 b. 내 아ᄃᆞᆫ 恒沙如來와 法王子 | ᄃᆞᆫ외요니 十方如來 그 弟子 | 菩薩根에 찰 마ᄃᆞᆫ치사ᄃᆞᆫ 普賢行을 닷마ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ시ᄃᆞᆫ니 나를 브터 일후물 세니이다 <楞嚴5:54b_本>
- (6) a. 若有信受此經法者 | 면 是人은 已曾見過去佛ᄃᆞᆫ와 恭敬供養ᄃᆞᆫ오며 亦聞是法이 나라
 b. ᄃᆞᆫ다가 이 經法을 信受ᄃᆞᆫ리 이시면 이 사ᄃᆞᆫᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ마 過去佛을 보ᄃᆞᆫ와 恭敬供養ᄃᆞᆫ오며 또 이 法을 드르니라 <法華2:157a_本>

12) 「便」には平声の場合と去声の場合があるが、副詞や連詞として用いられるのは去声の場合であり、2字漢語「即便」の「便」についても『漢語大詞典』に去声の記載がある通りである。なお、「便」の副詞や連詞としての用法について、『漢語大詞典』では、「⑭副詞。(1)即、就。(2)豈。表示反問。(3)只。(4)倒。表示讓步。(5)才。用來加強語氣。(6)已經。⑮連詞。(1)即使、縱然。(2)如果。」と記載されている。

13) 副詞の「곧」は、大きく分けて①「取りもなおさず」といった意味と、②「すぐに」といった意味で使われるが、「즉재」には①の意味はないと言える。

また、王喆(2011:45-55)では、「곧」の後者の場合をさらに2つに分けて、基準時直後の時点の意味「遅滞なくすぐに」と、基準時から遠くない未来の時点の意味「遠からず」の2つの意味に分けている。これは『標準国語大辞典』の記述でこの2つを分けているのに倣ったものであると言える。

14) この点については、脚註3)を参照。

(4)～(6)の例は、漢文の原文が「已曾」となっているものである。これも『大漢和辞典』、『漢語大詞典』ともに記載はないが、「すでに」、「かつて」といった意味である。これに対応する諺解文において、(4)では、「ᄃᆞᆫ마 아ᄃᆞᆫ」となっているため、「已」と「曾」を1字ずつ逐字的に読んだものと判断できる。ところが、(5)～(6)の例は、これと事情を異にする。(5)では「아ᄃᆞᆫ」と1語で、(6)では「ᄃᆞᆫ마」と1語でもって読んでいるためである。これらの「아ᄃᆞᆫ」と「ᄃᆞᆫ마」は、(4)で逐字的に読まれた「ᄃᆞᆫ마 아ᄃᆞᆫ」と同一の語である点も注目する必要がある。すなわち、漢文原文の「已」と「曾」が意味的に類似しており、また朝鮮語の「아ᄃᆞᆫ」と「ᄃᆞᆫ마」も類義語であるために、(5)～(6)の例では、それぞれの1語でもって読んだものと判断できる。なお、漢文原文「已曾」の読法としては、(6)のように「ᄃᆞᆫ마」と1語で読む用例がもっとも多くを占めている。つまり、「已曾」が2字漢語として固定化が進んでいたという認識を見出すことができるであろう。

このように、2字漢語を1語化したものと見なし得るような第1の例は、以下のようなものである。

- 「亦自，亦復，又復，又亦，蓋亦」を「ᄃᆞᆫ」
- 「俱共，皆共，普皆，咸皆，徧皆，悉皆，皆悉」を「다」
- 「互相，遞相，交相，更相，共相」を「서르」
- 「還復」を「도르」
- 「即便」を「즉재」または「곧」
- 「昔曾」を「네」
- 「已曾」を「ᄃᆞᆫ마」または「아ᄃᆞᆫ」
- 「既已」を「ᄃᆞᆫ마」
- 「與共」を「더브리」または「모다」
- 「雖復」を「비록～-(으/으)나」
- 「亦復」を「-도 ᄃᆞᆫ」

これらの2字漢語に共通する特徴としては、何よりも、互いに意味の類似した2字より構成される2字漢語が数多くを占めている、という点を挙げられるだろう。意味の類似点を見出しにくいような結合のものは「雖復」ぐらいで、残りの大部分は、同義語または類義語からなる2字漢語が多くを占めているのがわかる。

最後の2つについては、若干説明を要する。まずは、「雖復」の例である。

- (7) a. 雖復教詔ᄃᆞᆫ나 而不信受ᄃᆞᆫ니 於諸欲染에 貪着이 深故 | 라

- b. 비록 또 마르쳐 니르나 信受 아니 흐느니 여러 欲染에 貪着이 기픈 전치라 <法華 2:144a_本>
- (8) a. 八百弟子中에 有一人호되 號曰求名이러니 貪着利養^{호야} 雖復讀誦衆經^{호야}도 而不通利^{호야} 多所忘失^{홀씨} 故號求名이러니
- b. 八百弟子 中에 흔 사르미 이쇼되 일후미 求名이러니 利히 츄믈 貪着^{호야} 비록 또 한 經을 닐겨 외와도 通利티 못^{호야} 니저 일후미 만홀씨 일후미 求名이러니 <法華 1:113a-113b_本>
- (9) a. 雖復悟知一六亡義^{호나} 然猶未達圓通本根^{호노니}
- b. 비록 호나과 여섯괘 업슨 뜨들 아나 그러나 슌지 圓通本根을 아디 못^{호노니} <楞嚴 5:29b_本>

(7)~(9)は、漢文の原文が「雖復」となっている例であるが、『大漢和辞典』には記載がないが、『漢語大詞典』には「猶縱令。」とある。この記載は「雖復」の意味を1語として扱っているのか若干不明であるが、「雖復」全体で「~ではあるが」の意味をあらわすものと考えられる。これらに対応する諺解文においては、(7)~(8)では「비록 또」となっており、それぞれの漢字を1字ずつ読んでいるのがわかる。また双方の例ともに、後ろの部分において、讓歩をあらわす接続形語尾「-(으/으)나」, 「-아도/어도」が見られ、これらは「雖」を読んだ「비록」と呼応関係を見せているものである。「雖復」の読法としては、この2つのパターンが大部分を占めており、いずれの例も「雖復」を1語化したものと見なす認識は見られない。

しかし(9)の例はこれらとは事情が異なる。すなわち、「雖復」全体を「비록」と1語で読んでいるためである。この例では、「雖復」が1語化したものと見なし、1語でもって読んでいるものと解釈することができよう。(9)のような読み方をした例は、「雖復」全体の用例の中で、この1例に過ぎないが、たいへん貴重な用例であると言える。

次に、「亦復」の例である。

- (10) a. 若無來往인댄 亦復無聞이어나^스
- b. 흐다가 오며 가미 업숯던댄 또 다시 드로미 업스러니^스 <楞嚴3:23a_本>
- (11) a. 諸佛如來菩提涅槃도 亦復如是^호니라
- b. 諸佛 如來入 菩提 涅槃도 또 이 곧^호니라 <楞嚴4:37b_本>
- (12) a. 如來 | 亦復如是^{호야} 出現於世^호 如大雲起^{호고}
- b. 如來 | 또 이 곧^{호야} 世間에 나 現호믄 큰 구름 니루미 곧고 <法華3:14b_本>

(10)~(12)は、漢文の原文が「亦復」となっている例である。『大漢和辞典』には記載がないが、

『漢語大詞典』には「①也。表示同様。②又。」と記載がある。「また」という意味である。

「亦復」の読法は、上記(10)～(12)の3つの類型に分けられる。このうち(10)は、「또 다시」と、1字ずつ逐字的に読んでいるが、これは「亦復」の用例の中で唯一の例であり、その他の多くの用例は、(11)か(12)のいずれかである。

(11)の例では、「-도 또」となっている。この例では、前件の「亦」を助詞の「-도」でもって読み、後件の「復」を副詞語の「또」で読んだものと解釈することも可能であるが、以下のように、漢文原文が「亦」1字の場合にも同様に「-도 또」と呼応した表現で読まれ得ることを考慮すれば、「亦復」全体を「-도 또」と読んでいるものと捉えることも可能であろう。

- (13) a. 我等도 亦佛子 | 라
 b. 우리도 또 佛子 | 라 <法華2:11b_本>
- (14) a. 世尊하 我等도 於此에 亦應有分_하니 唯有如來_오 我等所歸_시니이다
 b. 世尊하 우리도 이에 또 받_드기 分이 있_느니 오직 如來_오 우리 가_스을 떠_서니이다 <法華4:48b_本>
- (15) a. 其人이 不復志求餘經_히며 亦未曾念 外道典籍_히면 如是之人에_사 乃可爲說_이니라
 b. 그 사_르미 _느외야 너나_든 經을 떠_데 求_티 아_니히_며 또 값간_도 外道の 그를 念_티 아_니히_면 이 _근히 _사름에_사 어루 爲_히야 닐_올띠니라 <法華2:173a_本>

(13)は「-도 또(～もまた)」という呼応関係でもって読まれた例、(14)は「-도」と副詞の「또」の間に他の別の要素が入り込んだ例、(15)は助詞の「-도」が「또」の後方に置かれた例である¹⁵⁾。いずれの例も「亦」1字が副詞の「또」のみならず、助詞の「-도」とも対応している例であると言える。

言い換えると、(11)においては、「亦復」を1語として捉え、その1語を呼応する「-도 또」という表現で読んでいるとも考え得る、ということである。

「亦復」を1語として捉えていたことがよりいっそう分明にあらわれたのが(12)の例である。この例では、「亦復」に対応する語としては副詞語の「또」のみであり、「亦復」をこの1語で読んだものと見るほかない。

従って、最後の2つの例も含めて、口語性の強いとされるこれらの2字漢語を読む際に、1

15) このように「亦」が「-도 또」といった呼応表現で読まれるのは、日本語の漢文訓読において、「亦」が古来より「モ亦」とも呼ばれ、助詞の「モ」と副詞の「マタ」が呼応して訓じられることが多く、さらに(13)～(15)の例と関連して、春日政治(1942/1985:279)において、『西大寺本金光最勝王経』の「亦」の訓法について、「亦字の位置によって、モは上にも又下にも置かれ、亦字の上に直接もし、又語を隔てても置かれる。」としているのと類似した現象であると言える。

語でもって読むのは、基本的には、同義結合、または類義結合の場合である、ということができるであろう。

また、2字漢語を1語化したものと見なし得るまた1つの場合として、以下のような例もあった。

- (16) a. 今汝 | 欲知記者 | 어든 將來之世에 當於六萬八千億諸佛法中에 爲大法師호리니
 b. 오늘 네 記를 알오져 커든 장츠 오느 뒤예 반드기 六萬八千億 諸佛法 中에 큰 法師 | 득외리니 <法華4:187b_本>
- (17) a. 而阿難은 護持我法호며 亦護將來엿 諸佛法藏호야 教化成就諸菩薩衆호리니
 b. 阿難은 내 法護持호며 또 將來엿 諸佛法藏을 護持호야 諸菩薩衆을 教化호야 일우리니 <法華4:57a_本>
- (18) a. 所謂本妙者는 本來自妙호야 不假修爲也 | 라
 b. 니르산 本妙는 本來 제 微妙호야 닷가호믈 비디 아니홀씨라 <楞嚴2:18a_解>
- (19) a. 是人이 於生에 既見其根호야 知人이 生人호며 悟鳥 | 生鳥호며 鳥 | 從來에 黑호며 鵠이 從來에 白호며 人天이 本豎호며 畜生이 本橫호며 白이 非洗成이며 黑이 非染造 | 라
 b. 이 사르미 나매 호마 根元을 보아 사르미 사름 나호믈 알며 새 새 나호믈 알며 가마괴 本來 거므며 鵠이 本來 히며 人天이 本來 서며 畜生이 本來 빗그며 히니 시서 득외온 디 아니며 거므니 믈 드려 밍ᄃ론 디 아니라 <楞嚴10:8b-9a_本>
- (20) a. 我等所從來는 五百萬億國이니 捨深禪定樂은 爲供養佛故 | 니이다
 b. 우리 브터 오믈 五百萬億國이니 기픈 禪定樂 브료믈 부터 供養호스오믈 爲혼 전칙 니이다 <法華3:109b_本>

(16)~(17)は、漢文の原文が「將來」となっているものであり、『大漢和辞典』では「①未来。前途。②もちきたす。もたらす。」と、『漢語大詞典』では「①欲來;打算來。②未來。③帶來;拿來。④下來;起來。」と掲載されている。ここでは「未来, 前途」のほうの意味で使われているものと見られるが、(16)の例は、それぞれ「將」を「장츠」、「來」を「오다」でもって読んでいる。この「장츠」はもともと「將次」という漢字語起源であるが、固有語化がかなり進んでいると

言い得る語である¹⁶⁾。この例では「장차」1語だけをもってしても「將來」の意味として通じそうなところであるが、実際の読法はそうではなく、「오다」を後ろに付した形になっている。従って、これらの例においては、「將來」を1語とする意識は希薄で、1字ずつ逐字的に読んでいるものと見ることができよう。なお、太田辰夫(1958/1981:277)では、この「將來」について、「おそらく<まさに……来らんとす>というのが原義で、その《來》が接尾辞と化したものであろう」と述べているが、(16)の読法は、この「原義」に忠実な読みであるといえることができるであろう。

その一方、(17)の例は、諺解文においてもそのまま「將來」と字音読みされている例である。「將來」の読法としては、このような字音読みの例がもっとも多くを占めており、「將來」自体が当時の朝鮮語の語彙として定着していたことがうかがえるであろう。

(18)の例は漢文の原文が「本來」となっているものであり、『大漢和辞典』には「もとより。はじめから。元來。」、『漢語大詞典』には「①原來，向來。②指人本有的心性。③謂本有心性没有泯滅。」と記載されている。これに対応する諺解文でもやはり「本來」と字音読みされている。「本來」はすべての例がこのように字音読みされており、例外はない。

(19)～(20)は、原文が「從來」となっている例である。『大漢和辞典』には「①もとから。これまで。②由来。來歴。③通ってくる。」、『漢語大詞典』には「①亦作“從徠”。來路;由來;來源。②歷來;向來。③從前;原來。」とある。このうち(19)の例では、「從來」は「もとから、元來」といった意味で使われていると見られ、諺解文においては、「本來」と読替えている。上の(18)の例と併せて、「本來」が当時の朝鮮語の語彙として確固たる位置を占めていたことをうかがわせる例であると言えよう。

これに対して、(20)においては、原文の「從來」を諺解文では「브터 오다」と読んでいる。この「브터」は1字目の「從」を読んだものと考えられるが、この例においては、動詞の「블다」として使われているものと見られる。また、2字目の「來」も「오다」と動詞として読んでおり、「우리 브터 오든」は「我々がついてきたのは」といった意味であろう。漢文の原文においても、「從來」の直前に「所」が置かれており、これを修飾する動詞として使われているものと思われる。いずれにしても、この(20)のような例においては、「從來」を1語化したものとは見なさず、1字ずつ逐字的に読んでいるものと判断できるであろう。

16) この「장차」という語の固有語化が進んでいる点は、活字本『楞嚴經諺解』[1461年]に朱書で加筆された校正部分において、もともと「將次·次」と印字されている部分に対して、「將」と「次」に「○」印を、「·次」の終声文字「○」に「×」を書き込んで校正している点からも確認することができる。すなわち、もともと漢字とその東国正韻式漢字音を併記していた部分に対し、漢字の表記自体を削除すると同時に、「次」の漢字音も伝来漢字音に改めているのである。

- (21) a. 諸佛之法은 常以一味로 令諸世間이 普得具足하야 漸次修行하야 皆得道果케하니라
 라
 b. 諸佛入法은 상네 혼 마스로 諸世間이 너비 具足을 得하야 漸漸 次第로 修行하야 다
 道果를 得게 하니라 <法華3:48a_本>
- (22) a. 彼之天王은 即是菩薩이 遊三摩地하야 漸次増進하야 廻向聖倫하논 所修行路 | 라
 b. 더의 天王은 곧 이 菩薩이 三摩地에 노녀 漸次로 더 나사가 聖倫에 廻向하논 修行入
 길히라 <楞嚴9:31a_本>

(21)～(22)は、漢文原文が「漸次」となっている例であり、『大漢和辞典』には「徐々に進むさま。しだいしだいに。だんだんに。」と、『漢語大詞典』にも「猶逐漸, 次第。」と記載されている。(21)の例において、これに対応する諺解文では「漸漸 次第로」と読んでいる。1字目の「漸」が諺解文では「漸漸」と疊語形式になっており、2字目の「次」は「次第로」と「第」を補った形になってはいるが、いずれにしても、「漸」と「次」をそれぞれ1字ずつ逐字的に読んだものであり、「漸次」を1語化したものとは認識していなかったことがうかがえる。

これに対して、(22)の例では、漢文原文の「漸次」を諺解文においてもそのまま「漸次로」と読んでおり、「漸次」のほとんどの用例がこのタイプで読まれている。そのまま字音読みをしてはいるが、「漸次로」と「-로」が結合している点からも、この語が当時の朝鮮語の語彙としても定着していたことがうかがえ、またこのことにより、原文「漸次」の「漸」と「次」を1字ずつ別々の語として認識していたのではなく、「漸次로」全体で1語化したものとして認識していたであろう点は指摘することができるであろう。

このように、(17)～(19)と(22)の例においては、それぞれの2字漢語を1語でもって読んでいるものと認め得るが、ここに再度まとめると以下ようになる。

- 「將來」を「將來」
 「本來」を「本來」
 「從來」を「本來」
 「漸次」を「漸次로」

上の2つ、すなわち「將來」と「本來」は、原文の2字漢語をそのまま字音読みした例である。このような場合、もちろん、原文の漢語をそのまま写したに過ぎないものとする可能性も無くはないが、むしろ、これらの語自体が当時の朝鮮語の語彙として定着をしていたものとする考え方ができるであろう。一方、下の2つは、これらとは事情が異なる。「從來」の場合は、諺解文において、「本來」と読替えをしているため、漢語の「從來」にあたる朝鮮語の語彙と

して「本来」が存在していたであろうことを推定することができる。「漸次」の場合も同様で、諺解文において「漸次_ㄹ」と接辞を付けて読んでいるため、この「漸次_ㄹ」もまた、当時の朝鮮語の語彙として定着していたであろうことがうかがえるのである。従って、2字漢語を1語で読むまた1つのパターンとして、その語が当時の朝鮮語の語彙として定着していた場合にそのまま字音読みされる、という点を挙げることができるであろう。

4. 結言

以上、本報告では、漢語史上において、口語性を反映しているともされる2字漢語が、15世紀朝鮮の諺解資料において、どのように扱われているかを調査した。こうした2字漢語の中でも、とりわけ、1字が接辞化して2字漢語を為す傾向が強いとされる副詞語を中心に取り上げ、これらの2字漢語を1語化した漢語として認識していたか否か、という点を主要な論点とした。いまここにその結果を振り返ると、以下の通りである。

1. 大部分の例は2字漢語を為す漢字を1字ずつ逐字的に読んでおり、その点、2字漢語を1語化したものと見なすような意識はたいへん希薄であったと言える。とりわけ、読まれた2語が互いに分離した位置に置かれている場合に、その傾向を強く感じ取ることができた。
2. その一方で、少数ながら、2字漢語を1語化したものと見なし得るような例も、いくつか見られた。その第1の例は、以下のようなものである。

「亦自, 亦復, 又復, 又亦, 蓋亦」を「ㄷ」

「俱共, 皆共, 普皆, 咸皆, 徧皆, 悉皆, 皆悉」を「ㄷ」

「互相, 遞相, 交相, 更相, 共相」を「서르」

「還復」を「도르」

「即便」を「즉재」または「곧」

「昔曾」を「네」

「已曾」を「히마」または「아리」

「既已」を「히마」

「與共」を「더브리」または「모다」

「雖復」を「비록~-(으/으)나」

「亦復」を「-도 또」

これらの2字漢語に共通する特徴としては、何よりも、互いに意味の類似した2字より構成される2字漢語が数多くを占めている、という点を挙げることができる。このことから、2字漢語を1語でもって読むのは、基本的には、同義結合または類義結合の場合である、ということが出来る。

3. また、2字漢語を1語化したものと見なし得るまた1つの場合として、以下のような例もあった。

「將來」を「將來」

「本來」を「本來」

「從來」を「本來」

「漸次」を「漸次」

上の2つは、原文の2字漢語を字音読みした例であり、下の2つは、朝鮮語の語彙として読替えをしているものと接辞を付けて朝鮮語の語彙化をしているものである。こうしたことから、2字漢語を1語で読むまた1つのパターンは、その語が当時の朝鮮語の語彙として定着していた場合にそのまま字音読みされる、というものである。

4. すなわち、2字漢語といえども、15世紀朝鮮の諺解資料においては、1字1字を逐字的に読むのが大原則であって、これを1語の朝鮮語として読むのは、原則として、2字漢語を構成する2つの漢字が同義結合あるいは類義結合の場合、または、その2字漢語がそのまま朝鮮語の語彙としても存在し定着している場合に限られる、といえる。このことから、これらを1語でもって読むのは、漢語の語彙として1語化したものと捉えるか2語のまま捉えるか、ということよりは、むしろ読まれた諺解文が朝鮮語の文として自然な文章になるかどうかという問題を重視し、同一の語あるいは類似した意味の語が重複して並んでしまうことを避けようとした結果であると考え得る。このように考えるなら、15世紀朝鮮の諺解資料の読みにあっては、漢語史に起こっていたとされる口語表現での2字漢語化という現象には、基本的に関心外であったのではないかと考えられる。

注記

本報告は、JSPS 科研費(課題番号25770145)による研究成果の一部である。

参考文献

- 牛島徳次(1956),「助字考 - 宋代以前 -」,『東京教育大学文学部紀要国文学漢文学論叢』7,東京教育大学文学部, pp.1-69
- 牛島徳次(1971),『漢語文法論(中古編)』,東京:大修館書店
- 太田辰夫(1958/1981),『中国語歴史文法』,京都:朋友書店
- 太田辰夫(1988),『中国語史通考』,東京:白帝社
- 小倉進平[河野六郎 補注](1964),『増訂補注 朝鮮語学史』,東京:刀江書店
- 春日政治(1938),「古点の況字をめぐって」,『国語と国文学』10-1, [春日政治(1984:341-364)に再収録]
- 春日政治(1942/1985),『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究(春日政治著作集 - 別巻-)』,東京:勉誠社
- 春日政治(1984),『古訓点の研究(春日政治著作集 - 第六冊-)』,東京:勉誠社
- 金岡照光(1978),『仏教漢文の読み方』,東京:春秋社
- 金文京(2010),『漢文と東アジア - 訓読の文化圏』,東京:岩波書店(岩波新書)
- 塩田義遜(1943),『法華經の研究』,東京:日蓮宗伝道要具
- 志部昭平(1983),「乙亥字本楞嚴經諺解について」,『朝鮮学報』106,朝鮮学会, pp.1-24
- 志村良治(1984),『中国中世語法史研究』,東京:三冬社
- 長尾光之(1972),「鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』にみられる六朝期中国の口語」,『福島大学教育学部論集』24,福島大学教育学部, pp.109-120
- 長尾光之(2005a),「いくつかの漢訳仏典における副詞と連詞(上) - 二音節語と二字連語を中心に -」,『行政社会論集』17-3,福島大学行政社会学会, pp.58-84
- 長尾光之(2005b),「いくつかの漢訳仏典における副詞と連詞(下) - 二音節語と二字連語を中心に -」,『行政社会論集』17-4,福島大学行政社会学会, pp.38-51
- 西谷登七郎(1958),「六朝経経語法的一端 - 増宕阿含經を中心として -」,『広島大学文学部紀要』14,広島大学文学部, pp.74-98
- 松尾良樹(1986),「『万葉集』詞書と唐代漢語」,『叙説』13,奈良女子大学文学部国語国文学研究室, pp.1-14
- 松尾良樹(1987),「『日本書紀』と唐代漢語」,『和漢比較文学』3,和漢比較文学会, pp.1-18
- 松尾良樹(1988a),「唐代に語彙における文白異同」,尾崎雄二郎・平田昌司 編『漢語史の諸問題』,京都:京都大学人文科学研究所, pp.55-70
- 松尾良樹(1988b),「漢代訳経と口語 - 訳経による口語史・初探 -」,『禅文化研究所紀要』15,禅文化研究所, pp.25-57
- 高正儀(1980),『十五世紀國語の副詞研究』,檀國大學校 大學院 碩士學位論文
- 國立國語研究院(1993),『15세기 한자어 조사 연구(Ⅰ)』,서울:국립국어연구원
- 金榮九(1985),『『論語』를 통한 虛詞 研究 試論』,서울大學校 大學院 碩士學位論文
- 金英培(2000),『國語史資料研究 - 佛教諺解 중심 -』,서울:도서출판 月印
- 南豊鉉(1971a),「“하다가” 攷 - 國語에 미친 中國語의 文法的 影響의 한 類型 -」,『語學研究』Ⅶ-1, 서울大學校 語學研究所, pp.11-22
- 南豊鉉(1971b),「十五世紀 文獻에 나타난 中國語의 文法的 影響과 呼應關係 形成에 대한 考察」,『漢陽大學校 論文集』5,漢陽大學校, pp.53-77
- 南豊鉉(1999),『國語史를 위한 口訣研究』,서울:太學社
- 閔賢植(1987),「韓國語 副詞에 대한 研究 - 中世國語 副詞의 類義語를 中心으로 -」,『國語教育』61・62,韓國國語教育研究會, pp.201-248
- 徐炯國(2005),『국어 접속 구성의 문법사적 연구』, 고려대학교 대학원 박사학위논문
- 安秉禧(1992a),『國語史 研究』,서울:文學과 知性社

- 安秉禧 (1992b), 『國語史 資料 研究』, 서울: 文學과 知性社
 安秉禧 (2009a), 『國語史 文獻 研究』, 서울: 신구문화사
 安秉禧 (2009b), 『國語研究와 國語政策』, 서울: 도서출판 월인
 安秉禧・李珖鎬 (1990), 『中世國語文法論』, 서울: 學研社
 이상훈 (2009), 「부사 ‘하물며’ 의 의미」, 서울대학교 국어국문학과 편 『국어학논집』 6, 서울: 도서출판
 역락, pp.209-222
 李崇寧 (1961/1981), 『(改訂增補版) 中世國語文法 -15 世紀語를 주로 하여-』, 서울: 乙酉文化社
 李賢熙 (1982), 「國語의 疑問法에 대한 通時的 研究」, 『國語研究』 52, 서울大學校 大學院 國語研究會
 李賢熙 (1994), 『中世國語 構文研究』, 서울: 新丘文化社
 李浩權 (1987), 「法華經의 諺解에 對한 比較研究」, 『國語研究』 78, 서울大學校 大學院 國語研究會
 李熙昇 (1940), 「外來語 이야기」, 『春秋』 2-10, 京城: 朝鮮春秋社, [李熙昇 (1947:164-193) に再収録]
 李熙昇 (1947), 『朝鮮語學論攷』, 서울: 乙酉文化社
 鄭濟翰 (1993), 「諺解文의 漢文 虛辭 翻譯에 관한 研究 -< 論語諺解 > 를 중심으로 -」, 『國語研究』 113,
 서울大學校 大學院 國語研究會
 許雄 (1975), 『우리 옛말본 -15 세기 국어 형태론-』, 서울: 샘 문화사
 許雄 (1989), 『16 세기 우리 옛말본』, 서울: 샘 문화사
 洪允杓 (1994/ 著者校正中), 『近代國語 研究 (I)』, 서울: 태학사
 王力 (1980), 『漢語史稿 (重排本)』, 北京: 中華書局
 王喆 (2011), 「한국어 순간부사에 관한 역사적 연구」, 『國語研究』 228, 서울大學校 大學院 國語研究會
 唐煒 (2009), 『日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読』, 札幌: 北海道大学出版会

工具書類

- 山口昭穂・秋本守英 編 (2001), 『日本語文法大辞典』, 東京: 明治書院
 諸橋轍次 (1966 ~ 1968), 『大漢和辞典 (縮写版)』, 東京: 大修館書店
 罗竹风 主编, 汉语大词典编辑委员会・汉语大词典编纂处 编纂 (1986 ~ 1994/2008), 『汉语大词典』, 上
 海: 上海辞书出版社
 章錫深 校注 (1954/2004), 『助字辯略 (排印本)』, 北京: 中華書局

用例集

以下に挙げるのは, 本稿で考察対象にした 2 字漢語の読みを, 第 2 章に示した順に掲げたものである。用例は, 原則として各 2 字漢語の読みのパターンごとに 1 例ずつ挙げるにとどめ, 同一の 2 字漢語に複数の読みのパターンがある場合には, そのつど例を挙げた。なお, 左辺の見出し語が四角で囲まれている用例は, 3.2 で挙げた, 2 字漢語を 1 語化したものと見なし得るような例である。

1. 「自」によるもの

- 即自 (1) a. 臨欲終時^하야 而命其子^하며 并會親族과 國王과 大臣과 刹利와 居士^하야 皆悉已集거^닐 即自
 宣言호^디 諸君이 當知^하라
 b. ^하마 주글 쯤 디러 아드^를 命^하며 아슴과 國王과 大臣과 刹利와 居士와 아오로 뫼화 다 ^하마
 묻거^닐 즈제 제 퍼 닐오^디 諸君이 반^디기 알라 <法華 2:222b_ 本>
 即自 (2) a. 物이 果無相^하면 則同龜毛^하고 物이 果非無^하면 即自有相^하리니
 b. 物이 果然 相이 업^스면 거부^의 터리 곧고 物이 果然 업^디 아니^하면 곧 제 相이 이시리니 <楞
 嚴 1:75b_ 解>

- 便自 (3) a. 如無智愚人^하야 便自以爲足^하다이다
 b. 智慧 업슨 어린 사람 곧^하야 곧 제 足을 삼다이다 <法華 4:43a_本>
- 益自 (4) a. 如以手掌^{으로} 撮摩虛空^뜻 ^하야 祇益自勞이언딩 虛空이 云何隨汝執提이리오
 b. 숭바당^{으로} 虛空을 자바 뜻^하야 더욱 제 鬚를 쑤니언딩 虛空이 엇대 네 자보물 조츠리오
 <楞嚴 2:70a_本>
- 徒自 (5) a. 徒自燒身^흔 들 何於苦惱에 欲求善報 | 리오^하니
 b. 흔갓 제 모를 손들 엇대 苦惱에 선^하 報를 求^하리오 ^하니 <法華 6:145b_解>
- 及自 (6) a. 是經은 難得聞이며 信受者도 亦難故로 凡書持讀說이 非假如來入 覆護^하며 及自有信願善根이던 莫之能矣리라
 b. 이 經은 시러 드로미 어려우며 信受^할 싸름도 쏘 어려울씩 물읷 쓰며 디니며 닐그며 닐오미 如來入 두퍼 護持^하샤물 비스오며 또 제 信願善根 뒷^느니 아니면 能히 問^하리라 <法華 4:88b_解>
- 既自 (7) a. 而分品이 似濫者^는 身子 | 既自領悟法說^하야
 b. 品^는 호미 윈 뜻호민 身子 | 하마 제 法說을 領悟^하야 <法華 2:2b_解>
- 各自 (8) a. 各自藏護^는 譬畜積忿毒^하야 不可凌犯^하시고
 b. 各各 제 마초아 護持호민 怒^하 毒을 毘화 거위 問호물 가즐비시고 <法華 2:117a_解>
- 本自 (9) a. 蓋衆生의 佛性이 本自圓成^하며 世間業行이 皆順正法^하니
 b. 衆生의 佛性이 本來 제 圓成^하며 世間 業行이 다 正法을 順^하니 <法華 6:78b_解>
- 或自 (10) a. 或得宿命^하며 或有他心^하며 或見地獄^하며 或知人間好惡諸事^하며 或口說偈^하며 或自誦經^하야 各各歡娛^하야 得未曾有^하리니
 b. 시혹 宿命을 得^하며 시혹 他心이 이시며 시혹 他獄을 보며 시혹 人間엿 도^하며 구즌 여러 이를 알며 시혹 이배 偈를 니르며 시혹 제 經을 외와 各各 즐겨 아리 잇디 아니호물 得호라 케 ^하리니 <楞嚴 9:94a_本>
- 常自 (11) a. 諸法이 從本來^하야 常自寂滅相이니 佛子 | 行道已^{하면} 來世에 得作佛^하리라
 b. 諸法이 本來부터 상네 제 寂滅^하 相이니 佛子 | 行道^{하면} 來世에 부터 得^하리호물 得^하리라 <法華 1:212a_本>
- 每自 (12) a. 爾時 阿難과 羅睺羅와 而作是念호되 我等이 每自思惟^하노니
 b. 그 씩 阿難과 羅睺羅와 이 念을 호되 우리 민상 제 스랑^하노니 <法華 4:47a_本>
- 親自 (13) a. 或不因師^하야 其修行人이 親自觀見호되 稱執金剛이로니 與汝長命^하노라^하며
 b. 시혹 스승을 因티 아니^하야 그 修行^을 싸르미 親히 제 보되 닐오되 執金剛이로니 너를 長命 주노라 ^하며 <楞嚴 9:117a_本>
- 甚自 (14) a. 而我等은 不預斯事^하야 甚自感傷호되 失於如來入 無量知見호라^하다이다
 b. 우린 이 이레 參預 問^하야 甚히 내 感傷호되 [感은 ㅁ스미 뵈 썬오 傷은 알폴 썬라] 如來入 無量知見을 일호라 ^하다이다 <法華 2:4b_本>
- 能自 (15) a. 阿難아 如是世界엿 十二類生이 不能自全^하야 依四食^하야 住^하느니
 b. 阿難아 이 마티 世界엿 十二類生이 能히 제 오디 問^하야 四食을 부터 住^하느니 <楞嚴 8:3b_本>
- 亦自 (16) a. 長者 | 亦自恐被焚者^는 譬佛이 示身三界^하샤 與民同患也^하시니라
 b. 長者 | 또 제 슬요물 니블까 저호민 부터 三界에 모물 毘샤 百姓과 시름 마티 ^하샤물 가즐비시니라 <法華 2:68a_解>
- 亦自** (17) a. 得是陀羅尼故로 無有非人이 能破壞者^하며 亦不爲女人之所惑亂^하고 我身이 亦自常護是人호리니
 b. 이 陀羅尼 得^호 轉츠로 사람 아닌 거시 能히 헐리 업스며 쏘 女人의 惑히와 어즈류미 得^되디 아니코 내 모미 또 이 사를 상네 擁護호리니 <法華 7:172a_本>

2. 「復」によるもの

- 倍復 (1) a. 佛이 此夜에 減度호샤 如薪盡火滅커시닐 分布諸舍利호스 와 而起無量塔호스 고 比丘比丘尼 | 其數 | 如恒沙호니 들히 倍復加精進호야 以求無上道호더라
 b. 부테 이 바리 減度호샤 서비 다아 브리 𑖅뎡거시닐 舍利를 分布호스 와 無量塔을 세습고 比丘比丘尼 그數 | 恒沙 곧호니 들히 倍히 더욱 精進호야 無上道를 求호더라 <法華 1:124a_本>
- 或復 (2) a. 前總叙에 曰호샤디 奢摩他中엿 微細魔事는 或汝陰魔 | 며 或復天魔 | 며 或着鬼神호며 或遭魍魎라호시고
 b. 알퐁 모도아 퍼샤매 니르샤디 奢摩他中엿 微細호 魔事는 시혹 네 陰魔 | 며 시혹 또 天魔 | 며 시혹 鬼神이 호호며 시혹 魍魎를 만나리라 호시고 <楞嚴 9:90a_解>
- 況復 (3) a. 心縱精明호들 欲何因緣호로 取夢中物호리오 況復無因호야 本無所有 | ㅅ너
 b. 므스미 비록 精明호들 므스 因緣호로 夢中엿 物을 取 | 코저 호리오 호들며 또 因이 업서 本來 잇논 고디 업스니ㅅ너 <楞嚴 4:59b_本>
- 須復 (4) a. 藥王아 在在處處에 若說커나 若讀커나 若誦커나 若書커나 若經卷所住之處에 皆應起七寶塔호디 極令高廣嚴飾호고 不須復安舍利니 所以者何호
 b. 藥王아 잇는 곧마다 니르거나 넉거나 외오거나 쓰거나 經卷 잇는 고대 다 七寶塔을 세요디 ㅁ장 높고 넉고 식시기 꾸미고 구티여 다시 舍利 두디 마롬더니 엿데어노 <法華 4:89a-89b_本>
- 須復 (5) a. 前에 言호샤디 行五波羅蜜이 不及一念信解라호시고 又云不須復起塔寺 | 라호시니 非廢於行也 | 라
 b. 알퐁 니르샤디 五波羅蜜 行호미 一念 信解를 문 미즈리라 호시고 또 니르샤디 구티여 또 塔寺 니르완디 말라 호시니 行을 廢호샤미 아니라 <法華 5:206b_解>
- 設復 (6) a. 若能勤進호면 猶可庶幾어니와 設復退墮호면 又安知未來之期호로 比前塵劫컨덴 不復過於是數耶 | 리오
 b. 호다가 能히 브즈러니 나가면 오히려 어루 거식러니와 호다가 또 물러디면 또 未來엿 그스므로 알뵈 塵劫을 가즐비컨덴 또 이 數에 더오디 아니호들 ㅅ데 알리오 <法華 3:165b_解>
- 若復 (7) a. 眞空實相은 擬心호면 即妄어니 若復分別有無是非호면 皆顛倒也 | 라
 b. 眞空 實相은 므스매 너기면 곧 妄어니 호다가 또 有無是非를 글히면 다 갓 ㅁ로미라 <法華 5:30b_解>
- 若復 (8) a. 若復有人이 以七寶 | 滿三千大千世界로 供養於佛와 及大菩薩와 辟支佛와 阿羅漢호야도 是人所得功德이 不如受持此法華經호디 乃至一四句偈호야 其福이 最多호니라
 b. 또 사르미 七寶 | 三千大千世界에 ㅁ득호니로 부터와 大菩薩와 辟支佛와 阿羅漢을 供養호야도 이 사르미 得호 功德이 이 法華經 受持호디 一四句偈에 니르니 ㄴ디 ㅁ호야 그福이 ㅁ 하나라 <法華 6:162a_本>
- 雖復 (9) a. 雖復教詔호나 而不信受호스니 於諸欲染에 貪着이 深故 | 라
 b. 비록 또 ㅁ르쳐 니르나 信受 아니 호스니 여러 欲染에 貪着이 기곤 전치라 <法華 2:144a_本>
- 雖復 (10) a. 八百弟子中에 有一人호디 號曰求名이러니 貪着利養호야 雖復讀誦衆經호야도 而不通利호야 多所忘失호썅 故號求名이러니
 b. 八百弟子 中에 호 사르미 이쇼디 일후미 求名이러니 利히 츄믈 貪着호야 비록 또 한 經을 닐거 外와도 通利티 ㅁ호야 니저 일후미 만호썅 일후미 求名이러니 <法華 1:113a-113b_本>
- 雖復 (11) a. 雖復悟知一六亡義호나 然猶未達圓通本根호노니
 b. 비록 호나과 여섯째 업슨 ㅅ들 아나 그러나 ㅅ지 圓通本根을 아디 ㅁ호노니 <楞嚴 5:29b_本>
- 亦復 (12) a. 若無來往인덴 亦復無聞어니호
 b. 호다가 오며 가미 업슌던덴 또 다시 드로미 업스려니호 <楞嚴 3:23a_本>
- 亦復 (13) a. 諸佛如來菩提涅槃도 亦復如是호니라

- b. 諸佛如來入菩提涅槃도 또 이 곧하니라 <楞嚴 4:37b_本>
- 亦復** (14) a. 如來 | 亦復如是하야 出現於世는 如大雲起하고
b. 如來 | 또 이 곧하야 世間에 나 現호든 큰 구름 니루미 곧고 <法華 3:14b_本>
- 又復** (15) a. 所以普賢이 再三言之하시며 釋尊이 又復助揚하시니
b. 그런대로 普賢이 다시곧 니르시며 釋尊이 또 도아 퍼시니 <法華 7:182b_解>
- 還復** (16) a. 還復如故者는 若果得佛하시면 即無所捨矣시리라
b. 도로 네 곧하샤든 하다가 果然 부터를 득하시면 卽을 꺼시 업스시리라 <法華 6:158b_解>

3. 即便・便即

- 即便** (1) a. 而不款待하시와 但初聞四諦하옵고 即便信受하시와 速取小果 | 라하니 盖自誤也 | 로다
b. 내 날호야 기드리습디 아니하시와 오직 처음 四諦 들듣고 즉재 곧 信受하시와 저근 果를 썰리 가조라 하니 제 외요라 토다 <法華 2:7a_解>
- 即便** (2) a. 時王이 聞仙言코 心生大喜悅하야 即便隨仙人하야 供給於所須호되
b. 그제 王이 仙人 말 듣고 마스매 마장 깃부를 내야 즉재 仙人 조차 求호는 거슬 供給호되 <法華 4:156b_本>
- 即便** (3) a. 其諸子中에 不失心者는 見此良藥의 色香俱好하고 即便服之하니 病盡除愈호고
b. 그 諸子 中에 마슴 일티 아니하니 이 良藥의 色香이 다 호호 들 보고 곧 머그니 病이 다 호호 <法華 5:156a_本>

4. 「次」によるもの

- 轉次** (1) a. 我滅度之後等은 乃五百의 轉次相授之辭 | 니
b. 나 滅度하 後 들호 五百의 올마 次第 서르 심기시는 마리니 <法華 4:34a_解>
- 轉次** (2) a. 堅固無上道하야 當見無數佛하시와 供養諸佛已하옵고 隨順行大道하야 相繼得成佛하샤 轉次 而授記하시니
b. 無想道에 구더 반되기 無數佛을 보스와 諸佛을 供養하옵고 조차 順하야 큰 道를 行하야 서르 니서 成佛하샤 올겨 次第 授記하시니 <法華 1:125b_本>
- 漸次** (3) a. 諸佛之法은 常以一味로 令諸世間이 普得具足하야 漸次修行하야 皆得道果케하느니라
b. 諸佛入法은 상네 호 마스로 諸世間이 너비 具足を 得하야 漸漸 次第로 修行하야 다 道果를 得게 하느니라 <法華 3:48a_本>
- 漸次** (4) a. 彼之天王은 即是菩薩이 遊三摩地하야 漸次增進하야 廻向聖倫호는 所修行路 | 라
b. 더의 天王은 곧 이 菩薩이 三摩地에 노려 漸次로 더 나사가 聖倫에 廻向호는 修行入 길히라 <楞嚴 9:31a_本>
- 次復** (5) a. 次復有佛하샤되 亦名日月燈明이시며 次復有佛하샤되 亦名日月燈明이샤 如是二萬佛이 皆同一字하샤 號 | 日月燈明이시며 又同一姓하샤 姓이 頗羅墮 | 러시니
b. 버거 또 부테 겨샤되 또 일후미 日月燈明이시며 버거 또 부테 겨샤되 또 일후미 日月燈明이샤 이 마티 二萬佛이 다 호가지로 호字 | 샤 號 | 日月燈明이시며 또 호가지로 호字이샤 姓이 頗羅墮 | 러시니 <法華 1:98b-99a_本>
- 次後** (6) a. 次後作佛하리니 已聞斯事하스울씨 佛今答之하시리니 汝等이 自當因是하야 得聞하시오리라
b. 버거 後에 부터 드외리니 하마 이 이를 묻즈울씨 부테 이제 對答하시리니 너희 반되기 이를 因하야 시러 들조오리라 <法華 5:102b_本>
- 次後** (7) a. 次後는 乃十地之果 | 니 無復修習矣니라
b. 버거 後는 十地入果 | 니 너외야 修習이 업스니라 <楞嚴 8:50a_解>

5. 「會」によるもの

- 亦會** (1) a. 世尊이 亦會於楞伽山에 爲大慧等하샤 敷演斯義하샤되

15 世紀諺解資料における「2 字漢語」の扱いについて

- b. 世尊이 또 아리 楞伽山에 大慧等을 爲하샤 이 쓰들 敷演하샤되 <楞嚴 2:63b-64a_本>
- 曾亦 (2) a. 我在十六數하야 曾亦爲汝說호씨 是故以方便으로 引汝趣佛慧하노라
b. 내 十六數에 이서 아리 또 너 爲하야 니를씨 이런도로 方便으로 너를 씨 佛慧에 가게 하노라 <法華 3:191b-192a_本>
- 適曾 (3) a. 我適曾供養하습고 今復還親觀하습과이다
b. 내 네 아리 供養하습고 오늘 또 도로 親히 覓습과이다 <法華 6:150a_本>
- 昔曾 (4) a. 先求不得은 譬昔曾教化 | 어시닐 後還退墮也 | 라
b. 먼저 求하다가 못 어두른 네 教化하야시닐 後에 도로 墮러들 가질비니라 <法華 2:187a_解>
- 已曾 (5) a. 華嚴아 是妙音菩薩이 已曾供養親近無量諸佛하스 와 久植德本하며 又值恒河沙等 百千萬億 那由他佛하니라
b. 華嚴아 이 妙音菩薩이 흐마 아리 無量 諸佛을 供養親近하스 와 德本을 오래 시므며 또 恒河沙等 百千萬億 那由他佛을 맞나니라 <法華 7:26a_本>
- 已曾 (6) a. 我 | 已曾與恒沙如來와 爲法王子호니 十方如來 | 教我弟子菩薩根者하샤되 修普賢行하라하시느니 從我하야 立名하니이다
b. 내 아리 恒沙如來와 法王子 | 도외요니 十方如來 그 弟子 | 菩薩根에 踰 마르치샤되 普賢行을 닷마라 하시느니 나를 브터 일후를 세니이다 <楞嚴 5:54b_本>
- 已曾 (7) a. 若有信受此經法者 | 是人是 已曾見過去佛하스 와 恭敬供養하스오며 亦聞是法이니라
b. 하다가 이 經法을 信受하리 이시면 이 사르든 흐마 過去佛을 보스 와 恭敬供養하스오며 또 이 法을 드르니라 <法華 2:157a_本>

6. 「已」によるもの

- 並已 (1) a. 野干之屬이 並已前死 | 어늘 諸大惡獸 | 競來食噉하며
b. 野干의 무리 다 흐마 먼저 주것거늘 여러 큰 모던 중식이 드되 와 머그며 <法華 2:127a_本>
- 皆已 (2) a. 心懷大歡喜하야 疑網을 皆已除과이다
b. 므스매 큰 깃부들 머거 疑心스 그므를 다 흐마 덜와이다 <法華 2:8b_本>
- 悉已 (3) a. 其父 | 聞子의 悉已得差하고 尋便來歸하야 咸使見之케하니라
b. 그 아비 아드리 다 흐마 差흔 들 듣고 미조차 곧 도라와 다 보게 하니라 <法華 5:158b_本>
- 已悉 (4) a. 於無量億劫에 行此諸道已하야 道場得成果호니 我已悉知見하노라
b. 無量億劫에 이 諸道를 行하야 道場에 果 일우물 어두니 내 흐마 다 아노라 <法華 1:150b_本>
- 久已 (5) a. 久已 植衆德本하샤 供養親近 無量 百千萬億 諸佛하샤 而悉成就 甚深智慧하샤
b. 오래 흐마 한 德本을 시므샤 無量 百千萬億 諸佛을 供養親近하샤 甚深智慧를 다 일우샤 <法華 7:6a-6b_本>
- 永已 (6) a. 我心大歡喜하야 疑悔永已盡하야 安住實智中호니
b. 내 므스매 마장 歡喜하야 疑悔 기리 흐마 다야 實智中에 便安히 住호니 <法華 2:26b_本>
- 漸已 (7) a. 父 | 知子心이 漸已曠大하고 欲與財物하야 即聚親族과 國王大臣과 刹利居士하야
b. 아비 아드리 므스미 漸漸 흐마 큰 들 알오 財物을 주고져 하야 즉제 아슴과 國王大臣과 刹利居士 되화 <法華 2:245b_本>
- 既已 (8) a. 既已全提하시고 復將疑啓故로 飭之하샤 使以信으로 得入케하시니라
b. 흐마 오로 드르시고 또 장츄 精誠으로 여르시릴씨 警誡하샤 信으로 시러 들에 하시니라 <法華 1:175b_解>

7. 「更」によるもの

- 復更 (1) a. 復更思惟호되 是舍 | 唯一門하고 而復狹小하니
b. 또 다시 스랑호되 이 지비 오직 헛 門이 잇고 또 좁고 저그니 <法華 2:61b_本>
- 轉更 (2) a. 此 | 必定死 | 로다하야 轉更惶怖하야 悶絕躡地커늘

- b. 이 받ㄷ기 一定히 주그리로다 하야 더욱 다시 두려 답써 주거 사해 디거늘 <法華 2:200b-201a_本>
 各更 (3) a. 故로 八方에 各更變二百萬億那由他國^호샤 皆令淸淨케^호시니
 b. 그럴씩 八方에 各各二百萬億 那由他國을 다시變^호샤 다淸淨케 ^호시니 <法華 4:123a_本>

8. 「相」によるもの

- 互相** (1) a. 明이 不循根^호고 寄根^호야 明發^호면 由是^호야 六根이 互相爲用^호리라
 b. 불고미 根을 좃디 아니코 根에 브터 불고미 發^호면 일로 브터 여섯 根이 서르 뿌미 ㄷ외리라 <楞嚴 4:115a_本>
遞相 (2) a. 諸ㅣ 皆肇於妄覺^호야 感於五行^호시 故로 日交妄發生^호야 遞相爲種也ㅣ라^호시니라
 b. 모든 거서 다 妄覺에 비르서 五行에 感^호씩 이런^호되니 니르샤디 妄이 셋거 發生^호야 서르 ㄷ외다 ^호시니라 <楞嚴 4:22a_解>
交相 (3) a. 夜叉ㅣ 競來^호야 爭取食之^호는 譬互起無明^호야 交相惱害^호시키고
 b. 夜叉ㅣ ㄷ와 와 ㄷ와 아샤 머구은 無明을 서르 니르와다 서르 보차 ^호야브료물 가즐비시고 <法華 2:117a_解>
更相 (4) a. 情想合離更相變易者^호는 或情變爲想^호며 合變爲離^호야 無定業也^호며
 b. 情想合離 서르變易^호호민 시혹 情이 變^호야 想이 ㄷ외며 어우루미 變^호야 여회요미 ㄷ외야 一定^호業이 업스며 <楞嚴 4:28b-29a_解>
共相 (5) a. 復於穴中에 共相噉害^호는 譬於幽陰에 業識이 相尋^호야 交爲讎對也^호시니라
 b. 또 구뭇 소매 서르 머거 害호민 어드운 ㄷ業識이 서르 推尋^호야 서르 冤讐入對 ㄷ외요물 가즐비시니라 <法華 2:128a_解>
 共相 (6) a. 薄福德故로 爲火所逼^호야 共相殘害^호야 飲血噉肉^호며
 b. 福德 열운 전즈로 불의 다와도미 ㄷ외야 다 서르 害^호야 피 마시며 고기 머그며 <法華 2:127a_本>

9. 「共」によるもの

- 各共 (1) a. 我等諸宮殿에 光明이 昔未有ㅣ로소니 此是何因緣이^어노 宜各共求^호之로다
 b. 우리 諸宮殿에 光明이 네 아니 잇더니로시니 이 엇던 因緣이^어노 各各 求^호모디 올토다 <法華 3:106b_本>
 亦共 (2) a. 菩薩은 煩惱涅槃이 不相留礙^호디 而云亦共汝作者^호는 以同事로 攝也ㅣ라
 b. 菩薩은 煩惱 涅槃이 서르 막디 아니호디 또 너와 호디 지소리라 닐오민 호디 일호므로 자브실씨라 <法華 2:207a_解>
 俱共 (3) a. 將與八萬菩薩와 俱共發來故로 先現此瑞^호시니라
 b. 장즈 八萬 菩薩와 호디 모다 나오실씩 문져 이 祥瑞를 나토시니라 <法華 7:14a_解>
 俱共 (4) a. 于時妙音菩薩이 於彼國에 沒^호샤 與八萬四千菩薩와 俱共發來^호시니
 b. 그뻘 妙音菩薩이 더 나라해 업스샤 八萬四千 菩薩와 다 호디 나오시니 <法華 7:17b_本>
俱共 (5) a. 一時에 警欸^호시키고 俱共彈指^호시니 是二音聲이 遍至十方諸佛世界^호시니 地皆六種震動^호더니
 b. 一時에 기춤^호시키고 다 彈指^호시니 이 두 音聲이 十方諸佛世界에 다 가시니 사히 다 六種震動^호더니 <法華 6:102b_本>
與共 (6) a. 其人이 若於法華經에 有所忘失一句一偈어든 我ㅣ 當教之^호야 與共讀誦^호야 還令通利케호리니
 b. 그 사라미 ^호다가 法華經에 一句一偈를 니즌 ㄷ 잇거든 내 받ㄷ기 마르쳐 더브러 讀誦^호야 도로 通利케 호리니 <法華 7:168b_本>
與共 (7) a. 母ㅣ 告子言^호디 汝父ㅣ 信受外道^호야 深著婆羅門法^호호엿느니 汝等이 應往^호야 白父^호야 與

共俱去 | 나라

- b. 어미 아들 드려 낳오되 네 아바니미 外道를 信受하야 婆羅門 法에 기피 着하엿스니 너희 가 아바났디 슬와 모다 다 가사 ㅎ리라 <法華 7:132b-133a_本>
- 共俱 (8) a. 父 | 語子言호되 我今에 亦欲見汝等師호노니 可共俱往이로다
b. 아미 아들 드려 낳오되 내 이제 쏘 너희 스스을 보습고져 호노니 모다 다 가사 올토다 <法華 7:135b_本>
- 皆共 (9) a. 以種種華香瓔珞幡盖와 及諸嚴身之具와 珍寶妙物로 皆共遙散娑婆世界호니
b. 種種華香瓔珞幡盖와 쏘 여러 가짓 몸 莊嚴호 것과 珍寶 微妙호 거스로 다 娑婆世界에 머리셔 비호니 <法華 6:105b_本>

10. 「皆」によるもの

- 亦皆 (1) a. 此等이 亦皆自虚妄業之所招引이니
b. 이들히 쏘 다 제 虚妄호 業의 불러 翫미니 <楞嚴 8:123a_本>
- 亦皆 (2) a. 諸佛이 亦皆隨喜者호 亦隨喜擁護也 | 시니라
b. 諸佛도 다 隨喜호 사문 쏘 擁護를 隨喜호 사미라 <法華 7:114a_解>
- 普皆 (3) a. 于時會中에 一切大衆이 普皆作禮호 습고 佇聞如來入 秘密章句호 습더니
b. 그 時 會中에 一切大衆이 너비 다 禮數호 습고 如來入 秘密章句를 듣조오려 기드리습더니 <楞嚴 7:27b_本>
- 普皆 (4) a. 所經諸國이 普皆震動호고 兩寶蓮華호고 作無量百千萬億種種伎樂호며
b. 지나시는 諸國이 다 震動호고 寶蓮華 비코 無量 百千萬億 種種 伎樂호며 <法華 7:161b_本>
- 咸皆 (5) a. 如是世界엿 食辛之人이 縱能宣說十二部經호야도 十方天仙이 嫌其臭穢호야 咸皆遠離호며
b. 이 마티 世界엿 辛 먹는 사르미 비록 能히 十二部經을 퍼 낳어도 十方天仙이 그 내 더러우물 슬호야 다 머리 여희며 <楞嚴 8:5b_本>
- 徧皆 (6) a. 因計知體 | 圓徧諸法이라 호야 遂立異解호야 謂無情이 徧皆有知라 호야 無所揀擇故로 曰호사디 無擇徧知라 호시니라
b. 아는 體 | 諸法에 圓徧타 호야 다른 解를 세여 낳오되 情 업스니 다 아로미 잇스니라 호야 漏히움 업슨 전조로 니르사디 漏히움 업시 다 아나다 호시니라 <楞嚴 10:56a_解>
- 悉皆 (7) a. 是人舌根이 淨호야 終不受惡味호리니 其有所食噉이 悉皆成甘露호리라
b. 이 사르미 舌根이 조호야 내종내 구즌 마슬 受티 아니호리니 그 먹는 거시 다 甘露 | 드외리라 <法華 6:55a_本>

11. 「同」によるもの

- 皆同 (1) a. 從人泊天히 皆同滔溺이로소니 云何復有水陸空行호리오
b. 사르미 브터 하늘헤 니르리 다 ㅎ가지로 브며 둠기리로소니 엇데 쏘 물와 물과 虛空에 둠 넓 거시 이시리오 <楞嚴 3:79b-80a_本>
- 皆同 (2) a. 言二千이 同時에 成佛호야 依報法化 | 皆同호시니라
b. 二千이 ㅎ뻘 成佛호야 依報法化 | 다 글홀 딸 니르시니라 <法華 4:64b_解>
- 皆同 (3) a. 末後에 同時에 於十方國에 各得成佛호야 皆同一號호야
b. 내종 後에 ㅎ뻘 十方國에 각각 부터 드외야 다 ㅎ號 | 글호야 <法華 4:64a_本>
- 悉同 (4) a. 設著不淨破弊衣服호야도 一行一住 | 悉同淸淨호리며 名曰寶相如來應供正遍知明行足善逝 世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊이리니
b. ㅎ다가 조티 문호 현 오슬 니버도 一行一住 | 다 淸淨에 글호리며 일후미 寶相如來應供正遍 知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊이리니 <楞嚴 7:53b_本>
- 又同 (5) a. 次復有佛호사디 亦名日月燈明이시며 次復有佛호사디 亦名日月燈明이샤 如是二萬佛이 皆同一字호사號 | 日月燈明이시며 又同一姓호사姓이 頗羅墮 | 러시니

- b. 버거 쯔 부테 겨샤디 쯔 일후미 日月燈明이시며 버거 쯔 부테 겨샤디 쯔 일후미 日月燈明이샤 이 마티 二萬佛이 다 훈가지로 훈 字 | 샤 號 | 日月燈明이시며 쯔 훈가지로 훈 姓이샤 姓이 顯羅墮 | 러시니 <法華 1:98b-99a_本>
- 亦同 (6) a. 諸佛本誓願은 我所行佛道를 普欲令衆生으로 亦同得此道^하느니라
b. 諸佛入本來入 誓願은 내 行훈 佛道를 너비 衆生으로 쯔 훈가지로 道를 得게 코져 ^하느니라 <法華 1:224b_本>
- 亦同 (7) a. 容貌 | 如佛^하며 心相이 亦同^호미 名正心住 | 라
b. 양지 부터 ^하며 心相이 쯔 곤호미 일후미 正心住 | 라 <楞嚴 8:25a_本>
- 亦同 (8) a. 亦同前助顯^하샤디 簡文^하시니라
b. 쯔 알릿 도아 나토샤미 곤호샤디 文을 적게 ^하시니라 <法華 1:228b_解>

12. 「悉」によるもの

- 皆悉 (1) a. 如是次第로 十方諸佛이 皆悉來集^하샤 坐於八方^하시니
b. 이 마티 次第로 十方諸佛이 다 와 모드샤 八方에 안즈시니 <法華 4:128a_本>
- 皆悉 (2) a. 汝等一人이 發眞歸元^하면 此十方空이 皆悉銷殞^하리니 云何空中^하잇 所有國土 | 而不振裂^하리오
b. 너희 一人이 眞을 發^하야 元에 도라가면 이 十方虛空이 다 스러 들어디리니 잇테 空中에 잇는 國土 | 뒤편 ^하야디디 아니^하료 <楞嚴 9:45a_本>

13. 「亦」によるもの

- 悉亦 (1) a. 菩薩이 聞은法^하고 疑網을 皆已除^하니 千二百羅漢도 悉亦當作佛^하리라
b. 菩薩이 이 法 듣고 疑心入 그르를 다 ^하마 더니 千二百羅漢도 다 쯔 받디기 부테 ㄷ외리라 <法華 1:243a_本>
- 又亦 (2) a. 於聲聞人^하에 亦不稱名^하야 說其過惡^하며 亦不稱名^하야 讚歎其美^하며 又亦不生怨嫌之心^하야 善修如是安樂心^하싯
b. 聲聞 사르미게 쯔 일흠 일크라 그 허믈 니르디 말며 쯔 일흠 일크라 그 어디롭 기리디 말며 쯔 怨嫌^하잇 모습 내디 마라 이 곤훈 安樂心을 이대 닷글싯 <法華 5:35b_本>
- 蓋亦 (3) a. 使人이 以類로 推之^하야 知自防閑^하야 庶無愆失之患^하시니 蓋亦利行之緒餘也 | 시니라
b. 사르미 類로 推尋^하야 제 마고물 알에 ^하야 허믈 시르미 업과더 ^하시니 쯔 利行의 근 나르미시니라 <法華 7:186b-187a_解>

14. 「又」によるもの

- 次又 (1) a. 次又漸增^하샤 以至圓空覺^하시며 證寂滅^하시니 是는 因入流相^하샤 成就菩提也 | 시니라
b. 버거 쯔 漸漸 더으샤 空과 覺과를 두려이 ^하시며 寂滅證^하샤매 니르시니 이는 入流相을 因^하샤 菩提 일우샤미라 <楞嚴 6:45b_解>

15. 能善・善能

- 善能 (1) a. 善能利益一切衆生호미 名饒益行이라
b. 이대 能히 一切 衆生을 利益호미 일후미 饒益行이라 <楞嚴 8:29b_本>
- 能善 (2) a. 又能善說法^하느니 如稻麻竹葦^하야 充滿十方刹^하야 一心以妙智로 於恒河沙劫에 咸皆共思量^하야도 不能知佛智^하리며
b. 쯔 能히 이대 說法^하느니 如稻麻竹葦와 삼과 대와 굴와 곤^하야 十方刹에 ㄷ득^하야 훈 ㅁ스ㅁ로 微妙智로 恒阿沙劫에 다 모다 스랑^하야도 能히 부텃 智를 아디 못^하리며 <法華 1:155b_本>
- 能善 (3) a. 世尊^하하 我 | 又獲是圓通^하야 修證無上道故로 又能善獲四不思議無作妙德호니
b. 世尊^하하 내 쯔 이 圓通을 어더 우 업슨 道를 ㄷ가 證혼 전츠로 쯔 能히 네 不思議 無作妙德을

이대 어두니 <楞嚴 6:36a-36b_本>

16. 「來」によるもの

- 今來 (1) a. 當時에 是我의 妻妾兄弟니 今來相度호야 與汝와 相隨호노니
 b. 當時에 이 내의 妻妾兄弟니 이제 와 서르 度호야 너와 서르 좃노니 <楞嚴 9:101a_本>
- 歸來 (2) a. 提獎阿難과 及摩登伽하샤 歸來佛所호시니라
 b. 阿難과 摩登伽를 자바 勸호샤 부터의 도라 오시니라 <楞嚴 1:38b_本>
- 將來 (3) a. 嘿而識之호야 卽勅使者호야 追捉將來호라호대
 b. 줌줌코 아라 즉재 使者 勅호야 미조차 자바 드려 오라 호대 <法華 2:240a_本>
- 將來 (4) a. 今汝 | 欲知記者 | 어든 將來之世에 當於六萬八千億諸佛法中에 爲大法師호리니
 b. 오늘 네 記를 알오져 커든 장차 오는 뒤에 받든기 六萬八千億 諸佛法 中에 큰 法師 | 드외리니 <法華 4:187b_本>
- 將來** (5) a. 而阿難은 護持我法호며 亦護將來엿 諸佛法藏호야 教化成諸菩薩衆호리니
 b. 阿難은 내 法護持호며 또 將來엿 諸佛法藏을 護持호야 諸菩薩衆을 教化호야 일우리니 <法華 4:57a_本>
- 本來** (6) a. 所謂本妙호는 本來自妙호야 不假修爲也 | 라
 b. 니르샬 本妙는 本來 제 微妙호야 닷가호물 비디 아니호씨라 <楞嚴 2:18a_解>
- 從來** (7) a. 是人이 於生애 既見其根호야 知人이 生人호며 悟鳥 | 生鳥호며 鳥 | 從來에 黑호며 鶴이 從來에 白호며 人天이 本堅호며 畜生이 本橫호며 白이 非洗成이며 黑이 非染造 | 라
 b. 이 사르미 나매 호마 根元을 보아 사르미 사름 나호물 알며 새 새 나호물 알며 가마괴 초來 거트며 鶴이 本來 히며 人天이 本來 서며 畜生이 本來 밋고며 힌니 시서 드외온 디 아니며 거트니 물 드려 밍마룬 디 아니라 <楞嚴 10:8b-9a_本>
- 從來 (8) a. 我等所從來는 五百萬億國이니 捨深禪定樂은 爲供養佛故 | 니이다
 b. 우리 브터 오른 五百萬億國이니 기쁜 禪定樂 보료문 부터 供養호스오물 爲흔 전치니이다 <法華 3:109b_本>
- 已來 (9) a. 從昔已來에 未曾顯說호엿다니
 b. 네브터 오매 값간도 顯히 니르디 아니호엿다니 <法華 4:86b_本>
- 已來 (10) a. 斯等이 久遠已來에 於無量無邊諸佛所애 植諸善根호야 成就菩薩道호야 常修梵行이로소니
 b. 이들히 久遠브터 오매 無量 無邊 諸佛스게 여러 가짓 善根 심겨 菩薩道 일위 상네 梵行 닷도소니 <法華 5:114b_本>
- 已來 (11) a. 所以者何오 是諸衆生이 世世已來에 常受我化호며 亦於過去諸佛의 恭敬尊重호스와 種諸善根호씨
 b. 엿데어노 이 衆生들히 世世로 오매 상네 내 化를 受호며 또 過去 諸佛스기 恭敬 尊重호스와 여러 가짓 善根을 시를씨 <法華 5:93a-93b_本>
- 已來 (12) a. 然이나 善男子아 我實成佛已來 | 無量無邊百千萬億那由他劫이니라
 b. 그러나 善男子아 내 實엔 成佛로 오미 無量 無邊 百千萬億 那由他劫이니라 <法華 5:130a_本>
- 已來 (13) a. 法說엔 明所化之因호샤되 但舉成佛已來호시고 而不言劫數호시고
 b. 法說엔 化호샤 因을 불기샤되 오직 成佛로 오물 드러 니르시고 劫數를 아니 니르시고 <法華 3:87b_解>

